

# たぐみ

## Craftsmanship

特集 小鹿田焼窯元後継者展

第14号

### 「幻のロシア絵本展」

を観て

いま東京都庭園美術館で開かれている「幻のロシア絵本一九二〇―三〇年代展(九月五日まで)を観た。ロシアの絵本は帝政時代末期にも美しいものがいろいろあつて、なかには浮世絵の構図をとり入れたものもある。

しかし一九一七年のロシア革命のあと、帝政ロシアの圧政から解放された画家や詩人たちはこぞって新しい絵本の制作にとりかかり、貴族好みの精緻な作風を捨て、よりシンプルでグラフィックな様式を生み出していった。未来を担う子供たちへの思いと、より大衆的な拡がりへの期待をこめて。

絵本のほかにも、そのころイリヤ・エレンブルグ(文学)やスタニフラフスキー(演劇)、エイゼンスタイン(映画)など革新的な時代を反映した前衛

的な藝術家が輩出した。

そういったロシア・アヴァンギャルドの成果は、当然ヨーロッパや日本にも影響を与え、吉原治良や柳瀬正夢、原弘など先端的な表現者たちの制作の糧となったともいわれる。

このたびの絵本展を観て私がまず感じたのは、子供のころ親しんだ絵本とりわけ「子供之友」(羽仁もと子創刊)との類似であつた。表現のわかり易さ、子供の成長への的確な目線からもそれは感じたのだが、絵本の形式も含めて児童教育をより社会化し大衆化していくうえでの試みを強く感じたのである。個性と自由な表現を尊重した新しいロシア絵本は、しかし一九三二年、社会主義リアリズムこそ唯一の「正しい」概念であると規定し、さらに民族の独自性を抑制し同化を強制したスターリンの政策によって批判され、次第に衰退していったのであつた。

(志賀直邦)

# 小鹿田焼窯元後継者展

会期 平成十六年九月十一日(土)～十八日(土)

九月十二日(日)は営業いたしません。

会場 銀座たくみ 二階ギャラリー

営業時間 十一時から十九時まで

日曜日・最終日は十七時半まで

主催 小鹿田焼技術保存会



窯元の製品陳列所



出品者、後左から坂本庸一、黒木隆、坂本浩二、坂本工、坂本健一郎、前左から黒木史人、黒木昌伸、柳瀬裕之、小袋道明、柳瀬元寿。

## 小鹿田焼後継者展によせて

田中雍子

いま小鹿田焼の窯元十戸のすべてに後継ぎの青年が揃いました。この皿山の陶工は総勢二十人。その最年長でこの秋八十歳になる老練の工人も、まだ準現役級の元気さです。また小鹿田焼



焼成中の登り窯

同業組合や、伝統技術保存会をとりまとめ、対外的にも皿山を代表する円熟の陶工は六、七十歳代の六名。そのすぐ下で、いまや仕事のし盛りの五十歳代三名とともに、小鹿田陶業の実質的な中核をなしています。

後継者と目されているのは四十歳以下の十名ですが、その半数の五名が、二十歳代の若者という心強さです。つまりこの皿山は八十歳を先頭に、各年齢層が重なりつづく職能集団で大変安定した構成をもっています。

いちばん若い層の五人は、親戚筋から婿に迎えられた一名をのぞき、すべて各窯元直系の男子。大学を卒えてから戻った者も、父と轆轤をならべて修行中です。

さらに他所から弟子をとつたり、陶工を雇ったりはしない慣習を守り、すべて家内労働でまかなう窯場ですから、定年もリストラももちろん無関係。そのうえ後継者難は全く無いとなれば、その純粋性と安定度は、他に類をみません。

いま、手仕事の好さを改めて見直そうとの風潮のなかに在って、こんな小鹿田への期待と評価は高まるばかりです。そうした働きにも淡々と対応し、決して傲らぬ人々です。

大河筑後川の源流地帯に位し、修験道の霊峰英彦山につづく山脈のなかに、豊かな陶土の層を発見し、水や薪も具わる一隅に、小石原の陶工が参画して、この皿山の開窯を見たのは、江戸時代中期、享保（一六一六―一七三八）の終わりころだったとされます。

遡れば朝鮮半島の陶技が伝えられてはじまった窯場です。当初は二、三戸だったようですが、約二八〇年ほどを



天日干風景



焼き上がった製品

経て、漸く十戸に増えたと聞けば、この日田の皿山の在り様の静かさが納得できません。

この陶郷を天与の宝珠とはかり懐ふかく包みこみ、その空さえも狭めた山雙こそが、皿山の静けさと小鹿田焼の伝統を護ってきた最大の防壁だったのは、疑いない事実です。

平成七年この皿山は国の重要無形文化財保持団体として指定されました。

国からその伝統の保持を委嘱されたのです。昭和六年、単身山越えして探訪

した柳宗悦が、古格を守る壺甕の形や鮮やかな釉色の美と質朴な暮らしぶりに感動し、世に推奨したときから丁度七十年後のことでした。これを以って小鹿田をめぐる第二の防壁と見なしてよいかも知れませんが。しかし、天与の地勢さえ開発で一変しがちないま、人為的な施策はその運営次第。つまりは

人心の確かな支えが無くては、危ういのです。

ただ未だに柳宗悦を“皿山の父”と仰ぎ、戦後いちはやく激励に訪れた濱田庄司や、昭和二九年皿山に滞在して制作したバーナード・リーチらの恩を忘れぬよう語りつぐ先輩と、その指導のもと素直に修行に励む後継者たちの有り様は、まことに心強いものがあります。

共有の山から得た原土を、平等に分け、唐白で粉砕、水簸し、成形は蹴轆轡、焼成は薪を焚く登り窯という古式です。製品は湯呑に皿、鉢、壺など日用陶器ばかりです。黒い胎土と白化粧土を活かした刷毛目や飛び鉋、飴や緑の釉かけなど手法も同じです。一基の共同窯と個人窯五基を焚きますが家毎の少差はあっても、作家的な個人差は無く、あくまでも民窯でありつつけようとしています。

老若男女を問わず、それぞれの年齢

体力に依じて家族こそつて参加する家業は、当然家族の絆を強め、ムラの融和も確かさを増します。土漉しほか細々とした下仕事をこなす女性たちの働きが、皿山の暮らしの凡ての要めになつてゐることも、忘れられません。

こうした基盤があつてこそ、そこか

ら生まれる陶器も健やかな存在感を持ちうるのでしょうか。ここには現代の日本人が忘れかけている日本の暮らしの素型がゆるがぬままに在ります。この会は、そうした環境のなかで、氣負わず器づくりにいそしむ若者たちを、見守る地元の熱意に、たくみの誠

意が加わつて実現しました。技術の未熟さや至らなさは、厳しくご指摘いただきたく存じますが、彼等の初心とその佳き志を賞でつつ、同時代を生きる歎びを、ともに味わつていただきたく、心からお願ひ申し上げます。

(日本民藝館館友)

## 小鹿田へのみち

列車の出張から飛行機を利用するようになり、小鹿田は東京から半日少しで行けるようになった。

早朝の便で福岡へ飛び、そこから高速バスで筑後平野を横切り、小石原への上り口、杷木を過ぎ、日田に着く。

日田からはマイクロバスのような小さな路線便を使う。一日に五便の皿山行きバスを待つ間に近くの竹細工店

に寄り、メテポ、ナバテポ類を注文するのがいつもの動きである。

日田からのバス道は市街地を抜けるとしばらく田園風景の中を走り、川沿いにいくつかの集落を過ぎ、杉の山間に入る。穏やかな坂道を登り、空が大きく開けると皿山の入り口である。この先に集落はない。細い林道にも近い道が乙舞峠を越え宝珠山村に続くだけ

## 笠原 勝

である。祭日はいざ知らず、途中からは乗客は私一人の事ばかりである。

集落は道を挟んで左右に窯元が並び、水の流れを利用した唐臼が水音を立てて陶土を搗いている。庭先には女性達が水簸の仕事をしている姿が見え、ロクロを終えた皿や鉢が細い板に並べられて日に干されている。

組合長宅にまず挨拶に訪れ、ひとしきり話し込むのが小鹿田でのスタート。何時もは一番上の窯から順番に訪ねて巡り、途中で盃を傾けることがなければ、六軒程、ロクロを挟んでよもやま話をしながら商品選びをさせてもらう。





登り窯遠景

話しながらもロククロの手は休めず、製品が作り出されてゆく。刷毛打ちもトビカンナの模様付けも実にリズムカールに行われてゆく。電動ロククロを見慣れた眼には蹴ロククロの動きも新鮮に見える。

山間の窯場は陽の落ちるのも早い。いつもの山のそば茶屋が今夜の宿。窯元十軒が揃い酒盛りが始まる。

翌早朝、川の流れと唐臼の音で目を



唐臼

覚まし、二日酔い気味の体で一番上の公園に登る。ここは小鹿田の集落が一歩出来る格好の場所だ。

集落を見ながら一子相伝、家族労働だけで、機械にも頼らず二百八十有余年続いてきた不思議さを思う。そして次の世代を担う後継者が各窯に揃ったことをうれしく思う。

十軒が同じようなものを作りながらそれぞれ微妙に違う窯の特徴。トビカ



水簸場

ンナのきれいな窯元、釉薬の発色がいい窯元、青土瓶のうまい窯元、力のある大物作りの窯元等々。それでも今の十軒あつての小鹿田皿山の魅力。まさに民窯の原風景がここにある。

朝食後、昨日回れなかった窯元を回り、昼食後には小鹿田を後にし、次の産地に向かう。幾度訪ねても不思議な魅力のある窯場だ。

## 昔日回想

瀧田 項一

こゝ数年のあいだに次々とあの頃の、かの人、あのひと達が皆んな世を去って気が付いてみたら、完全に代替りとなつて了つた。

寂しい限りであるが、いま振りかえつてみると、みんな元気だつたあの頃は活々として民藝のモノに熱い情熱を燃やし、競つてモノを求めた。



いんこ

民藝と稱する枠から外れても、自ら求め出したモノへの歎びを互いに見せ合つて興奮したものである。

心を躍らせてモノを愛した、あの頃の時代はいつしか消えて了つた、そして、あの頃たがいにもノを介して歎こび合つた仲間たちも今は亡い。

未だまだ今に比べれば貧しかった筈なのに、日日胸がわくわくする思いがどこかに在つた、たくみの包み紙を拡げるのもどかしく、中から現れ出るモノを掌の中で大事にだいに慈しんだものである。

そして仲間たちと歎こび合つたその仲間は既に亡い。

たゞその頃のものがボクの家の中で過ぎ去つた日々を話しかけてくれる。かすかに消え去らうとするメモリーの  
中で――。

どこまでも 哀しき響き

蝉しぐれ

項一

展示会あんない

### 手織りの古裂と小裂の会

会期 九月二十五日(土) ～ 三十日(木)  
会場 たくみ二階サロン

こぎれ、というのは昔から人気があつて、大小、新古、柄行にかかわらず使い道の多いものでした。美しい布は女性にとつて憧れの的でしたが、江戸時代、布地は一反一着分でなければ求められなかつたもの。それを一寸、一尺単位の切り売りをはじめて大人気を博したのが、江戸室町の三井越後屋呉服店、今の三越でした。

たくみでは、このたび永い間に蒐まつたこぎれの数かずをご覧に  
いれ、皆様のお役に立ちたいと考えました。布地の種類は、山陰の  
絵紘(主に古作品)や弓ヶ浜嶋田  
悦子工房の絵紘と木綿縞、沖繩川  
平織(石垣島) 緋着尺裂、伊勢崎  
の手織木綿そのほか。どうぞお愉  
しみ下さい。

たくみ歳時記

## 沖縄読谷のやきものよみたん

沖縄の陶器のなかで近ごろとみに人気の高いのが本島中部、読谷村のやきものである。戦後すぐ復活した那覇の壺屋窯が、周辺が市街化するにつれ薪を焚く登窯が公害とされ、日本復帰の年四十七年に読谷村に金城次郎が移り住み、登窯を築いた。

その後次第に登窯がふえ、南蛮手の



北窯松田共司の角鉢

荒焼の窯も首里などから移ってきた。今回はそれらから二つを紹介しよう。

上の角鉢は読谷の北窯の松田共司の作、白化粧の上に呉須と鉄釉で雄渾な草花文を描いている。花生として好適であろう。寸法は正面が二十三センチ、高さと同行は各十八センチ、お値段は二五、〇〇〇円である。

下の徳利は新垣栄用窯のもの。いずれも泡盛用で丸い品はマスともいいお預け徳利であろう。長いのはタワカシ(鬼の腕)とよぶ。四、五〇〇円、マスは二、三〇〇円である。



新垣栄用窯の徳利

## あとがき

大岡山の東京工大で「G・ワグネルが開いた近代日本陶芸・先端セラミックスの美・用・学の世界」という展示講演会が開かれます。会期は十月五日から十日まで。会期中、百年記念館内特設ショップでは島岡達三先生一門や濱田庄司先生の孫友緒氏の作品が展示され、学内価格で販売されます。

また十日(日)二時過ぎからは島岡先生の講演が多目的ホールで行われます。G・ワグネル先生は大学創始時の大恩人とのことで、東工大では地域や外部の方たちにもぜひお越しいただき交流を深めたい由。特設ショップはたくみと黒田陶苑の協力で行います。場所は東急目黒線大岡山駅前すぐ。一見の価値があると思います。(S)

発行 株式会社たくみ

東京都中央区銀座八十四一二  
発行責任者 志賀直邦

電話 〇三―三五七―二〇一七  
FAX 〇三―三五七―二一六九  
振替 〇〇―一〇―二―三五六五九  
定価 六〇円(税込)